シリーズ 人権教育

ぼくの大切なもの

ぼくのじいちゃんの家はすぐ隣にあります。家どうしが庭でつながっていて、いつでも会いに行けます。幼稚園の頃のぼくの楽しみは、じいちゃんの膝の上でその日のできごとや好きな図鑑の話をすることでした。小学生になると、勉強や友だちとの悩みなども相談するようになりました。じいちゃんはいつも静かにうなずきながら、最後には「だいじょうぶ。だいじょうぶ。」と頭をなでてくれました。するとぼくはいつもほっこりとした温かい気持ちになれるのでした。

ぼくが四年生になる頃から、じいちゃんはベッドで寝ていることが多くなりました。ぼくはじいちゃんの背中をさすったり肩をもんだりして、じいちゃんの部屋で過ごしました。そんな時、いつもぼくが大人になったときの話になり、ぼくとお酒を飲みながら話をするのがとても楽しみだと言っていました。

夏、じいちゃんの元気がどんどんなくなってきました。「だいじょうぶ？」と聞いても静かにうなずくだけでした。背中をさするとすごく痩せていて、とてもびっくりしました。

数日後の朝、ママがじいちゃんの家にバタバタと行き来していたので、「どうしたの？」と聞くと「じいちゃんが天国にいってしまったの。」と言いました。大急ぎでじいちゃんの家に行くと、じいちゃんはいつものように優しい顔でまるで眠っているようでした。話しかけても何も返してくれません。〝死ぬってどういうこと？じいちゃんはどこに行ったの？〟その時のぼくにはわからないことばかりでした。ただ、膝に座って話を聞いてもらうことも、背中をさすることも、もうできなくなってしまったことは分かりました。

ぼくは五年生になりました。登校班や委員会活動などで、これまで以上に頼られることが増えました。登校班では班長になり、班のみんなを安全に連れていかなければならないので、毎日とても緊張しました。

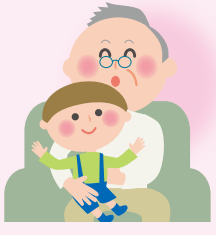
ある日の朝、「みんな並んで。」とぼくが言っているのに、一人の一年生がなかなか聞いてくれません。何回言っても全く聞いてくれず、そのうちに他の一年生も勝手なことをしだしました。「ぼくの気持ちなんてみんなわかってくれない。もう嫌だ！」とイライラした気持ちで一日を過ごしました。

夕方、隣の家に久しぶりに行ってみました。リビングには穏やかな笑顔でぼくを見つめるじいちゃんの写真がありました。じっと見ていると、「だいじょうぶ。だいじょうぶ。」とぼくに語りかけてくれている気がしました。すると、イライラしていた気持ちがふっと軽くなり、ふんわりと温かくつつまれたような気持ちになりました。

じいちゃんはもう隣にはいないけれど、膝の上に座っていろいろな話を聞いてもらった後の、あの何とも言えないほっこりした気持ちはずっとぼくの心の中に残っていて、ぼくを温めてくれているんだな、とそのとき気がつきました。

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。」

心の中でつぶやきながら、明日も一日がんばるよ。じいちゃん、ありがとう。



問合せ先 人権教育課 ☎077-528-4592